

入選

「命の源」「寒水」ひやみず

青森県 黒石市立厚目内中学校

三年 寺口徳一

「わあ、とてもきれいでおいしい水だね。」僕の学校にいる先生の一言でした。これは、学校の授業で、湧き水の水源地に行ったときのことです。僕は、よく地域のことを知ってもらうために、新しく転任してこられた先生を水源地に案内しています。

僕達の住んでいるところは、八甲田山系の毛無山という山のすそにある小さな村の厚目内というところです。人口約百人、標高約四百メートルの高冷地です。僕達の村では高冷地野菜がさかんで、僕の家でも野菜を作っています。作物の種類は、人参、白菜、アスパラなどです。また、山の恵みであるみずみずしい山菜がとれて、いろんな人がとりに来たりします。そんな豊かな自然環境に囲まれた地域です。

とここで先ほど紹介した僕達の地域の湧き水は「寒水」という名前です。そして、その「寒水」によく僕は行きます。この水は、毛無山から岩や石を通って流れているのでとても透き通っていておいしいです。水がきれいな証拠にサンショウウオというきれいな水でしか住めない動物も住んでいます。僕は、その水を水道水や農薬用水として利用しています。だから、たまに水道の蛇口から小さなエビみたいな生物やサンショウウオが出てくることもあります。

僕は、この「寒水」がとても自慢です。厚目内に来る人みんなは、水のおいしさに必ず驚きます。わざわざ水をポリタンクにくみにくる人もいるほどです。農業の手伝いをしたあとや、部活で走り終ったあとに飲む水は、冷たくて最高です。また、その「寒水」という名前の通り真夏の暑い日でも八度以下という水温でも冷たいです。ですから当然冬は水道水を止めておくと水道管の中で水が凍ってしまいます。冬だけは、どこの家でも水は出しっぱなしにしています。冬に厚目内に来た人は、この光景にみんな驚きます。

僕は、中二の時に京都に修学旅行に行ってきました。ホテルに行つてのどがかわいたので水を飲んだら、ぬるくとてもまずかったです。やはり厚目内の「寒水」とはちがつて塩素などの消毒剤が入っているのかと思いました。同じ日本という国なのに、こんなにも水にちがいがいるというのは、とても残念なことだと思います。だから、ミネラルウォーターなどを買っているんだろうなあと改めて思いました。都会の人たちは、水の本当のおいしさを知っているのかと思います。その点で、僕は厚目内に住んでいても幸せだと思っています。

そこで、都会のようなまずい水に「寒水」がならないようにしなければなりません。僕は、地域の人たちと協力し合つて、「寒水」の泥や落ち葉を取り除いたり、ゴミを拾ったりしています。また、学校でもボランティア活動の一つとして、みんなでゴミ拾いをしています。しかし、また一年たつと同じくらいのゴミがたまってしまう。それがとても残念です。だから、僕達がこれからの「寒水」を守っていかねければなりません。「寒水」がいつまでも名水として、あり続けるためには、僕達が責任を持って守っていききたいと思っています。

世界には、水も飲めない人や泥水を飲んでいる人達がたくさんいると聞いています。その人達にもきれいでおいしい水を飲んでもらいたいです。そして、本当の水のおいしさを世界の人達に知ってもらいたいです。そのためには、世界中の人々が、

「水ってこんなにもおいしいんだ」といえるようなればいいと思います。

僕は、このように「寒水」を飲むことはとても幸せだと思います。この幸せをそまつにしないで、これからも「寒水」を大切にしていきたいです。そして、世界中の人々が水と共に暮していければいいと思います。

「未来を変える私達の今」

山形県 山形市立第十中学校
三年 高橋 春香

「水は大切だ。」とよく聞きます。私が小学生の時はそう言われても、深く考えはしませんでした。やはり、蛇口をひねれば水がでるし、川には水が流れている。そんなことを普通だと思っていたことが理由だと思います。

けれども、私の水に対しての考えは中学校に入ってから変わりました。そのきっかけは学校の近くの川を清掃したことでした。

登下校の時に毎日見る「大川」には、お菓子の袋やペットボトルなど、たくさんゴミがありました。そして、そこには時々カモが泳いでいるのです。その光景に私は

「もっときれいな川で気持ち良く泳いでほしい。」と感じました。

それから三か月ほど経ったある時。大川清掃に参加することにした私は、とても楽しみにしてその日を迎えました。自分の手で大川をきれいにし、カモが気持ち良く泳げるようになると思うとワクワクしました。

清掃が始まると川の中に入り、ビニール袋やジュースの缶などを拾いました。

順調に拾い集めていくと、なんとテレビが落ちていました。これは、粗大ゴミを収集してもらうには手間やお金がかかってしまいます。そのため、捨ててしまい手間やお金をかけないようにした結果だと思います。

そして、二時間の清掃を終えるとゴミ袋いっぱいになり、参加した人が集まりました。川を見ると少しだけきれいになっていました。しかし、ゴミを平気で川などに捨てる人の心を正さなければ、いつまでも水がきれいにはならないと思いました。

この清掃を通し、水の大切さを考え始めました。私達の生活に絶対に欠かせないはずの貴重な水なのに、あることが普通だと思ってしまうのが現状で

す。生活の中で水も私達の考えも改善できると思った私は家で実践してみました。

まず、基本的な事からしようと思いました。水は必要以上に使わないようにしたり、洗濯の水はお風呂の残り湯を使ったり、米のとき汁を植物にかけたりしました。今も継続して行っています。最初は私だけでしていましたが、だんだんと家族も一緒にしてくれるようになりました。天ぷらを揚げた後の油をそのまま流すのでなく新聞紙でふき取るなど本格的に行うようになると、インターネットでいろいろな方法を調べるまで、水に対して真剣になりました。

水は地表面積の約七〇%を覆っています。それでも限られているものなのです。工業の発達や科学の進歩などで環境の悪化が進んでいる今、この地球で生活している私達自身で水について考えなければいけないと思います。一人で地球規模の問題を解決することは無理です。しかし、一人一人が身近な生活の中から改善していくことができれば、美しい地球を未来へ引き継ぐことが可能だと思います。

今の水を変えることは、私達の考え、生活を変えれば容易なことだと思います。未来の地球が美しいものになるかは、一人一人の努力にかかっています。今の努力できっと、きれいな水になり住みやすい環境になると思います。

改めて水について考えると、ゴミの処理はとも大きく関わっています。きちんと分別することはもちろん、リサイクルをしてゴミの量を減らしていくという努力も必要だと感じました。生活の中にある普通のことには、忘れていただけで本当はとても大切なのです。もっと自分自身で考えて、少しずつの努力で地球を守っていききたいです。

「市の堀用水の水」

栃木県 高根沢町立北高根沢中学校
三年 加藤 広 佳

「たんたん田んぼの高根沢」

これは私の町の歌の一節です。この歌詞からもわかるように、私の住んでいる高根沢町は水利の便に恵まれた坦々とした水田地帯が広がり、栃木県を代表する米どころとして名高い町です。しかし昔は、水に恵まれない、米作りをするのが大変な地域だったそうです。この事実を知ったとき、私は信じられませんでした。そこで、現在の町になるまで何が起こったのか、調べてみることにしました。

約三五〇年前の春、「市の堀用水」という用水路ができました。それまでは、井沼川の水を利用して農業を営んでいましたが、水量の確保も容易でなく開田も難しかったそうです。そこで土室村の地頭山崎半蔵が、水量豊かな鬼怒川からの用水路を計画、多数の人足と十年の歳月をかけて完成したのです。当時は、道具などもなかなか手に入らず、作業のほとんどが人間の手によって行われたそうです。

その後、何度かの改良工事が行われ、延長四十三km、受益面積約二三〇〇haの大用水路となりました。この用水路が通る地域は、県内でも指折りの米どころになっっていることから、市の堀用水は大きな役目を果たしていることがわかります。私も、高根沢町が水に恵まれた地域になったのは、市の堀用水のおかげだったことがわかりました。

市の堀用水の歴史を知った私は、昔の人が手掘りどれくらいの高さを掘ることができたのか、疑問に思いました。「延長四十三km」と本に書いてある用水の高さを見ても、長いのか短いのかピンとこなかったもので、高根沢町から市の堀用水の旧取入口まで、用水沿いの道を、父の車でたどってもらうことにしました。

まず、自宅の一番近くに流れる市の堀用水を見ました。用水の幅はとても広く、水量も豊かで、ゴウゴウとうなりを立てて流れていました。私は父の車で、

用水沿いの道の流れとは逆方向の、取入口に向かって走りました。昔と今の場所は違うらしいけれど、それでも豊かな水の原点を少しは知ることができると思っただけです。車は用水路沿いに桑窪、台新田、飯室と進んでいきます。ふと窓の外を見ると、たくさんの水田を見ることができました。そして出発して数分後、私たちの車は高根沢町を出、隣のさくら市に入りました。もちろん、周囲には豊かな水田地帯が広がっています。

それからまたしばらくすると、市の堀用水取入口のある塩谷町に入りました。用水の幅は、私の町で見たときよりも狭くなっており、流れる水量も少なくなっています。少しして、私たちの車は、ついに用水の旧取入口があった場所に到着しました。ここまで来るのに、出発してから実に一時間、車はほとんど走りっぱなしでした。こんなに長い距離を、昔の人々はたった十年で掘ってしまったのです。たいした道具も使わず、ほとんど手掘りで……。私は、「すごい」の一言でしか表現できませんでした。

「市の堀用水」によって、私たちの町はもちろん、用水路が通る地域は、豊かな米作りをすることができるようになりました。市の堀用水がもたらしてくれた「水」が、現在の豊かな収穫をもたらしてくれたと言っても言い過ぎではないでしょう。現在は用水から水田に、簡単に「水」を手に入れることができますが、それを当たり前のことのように思ってしまうてはいけません。用水路の開発に力を尽くした人々、用水路を毎日掘った人々など、多くの人々の汗と涙が流されたことを忘れず、感謝しなければいけません。

私たちの身近に存在し、私たちに豊かさをもたらしてくれる「水」。これからは、昔の人々に感謝しながら、「水」を大切に使いたいです。

「水への「ありがとう」」

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校
二年 秋 葉 光 恵

「水についての作文を書くように」春休み前にそう言われて、正直困った。先生は思っていることをそのまま書けば良いと言われたが、水について深く考えたこと自体ない様に思える。私達の生活の中で「水」は蛇口をひねればいつでも出てくるものであり、そのためか際限のないものという認識が私の中にはあるのだ。これでは感謝のしようがない。そんな思いで向かえた春休み。何か参考になれば、位の気持ちで水の話の本を探しに図書館に行った。そこで出会った一冊の本により私の認識は大きく変わる事となる――。

家へ帰り、その本を読むと、自分の認識の甘さをつきつけられた思いだった。そこにあつたのは水が不足している国のこと。例を挙げればモンゴルなどの乾燥した地域だ。そのような国では水源がとぼしい為、朝顔を洗うこと一つにしたって何kmも離れた川にくみに行かなくてはならないのだ。そういった国のことを私は今まで全く知らなかったので驚きを覚えた。と、同時に自分が水に対してどれだけ無知であつたのかが身にしみた。考えてみれば、私は朝起きてから寝るまでの間にどれだけ水に頼っているのだろうか？洗顔、歯磨き；挙げていったらきりが無い。それを「当たり前に来るものだから」、「蛇口をひねればでてくるものだから」という理由で感謝してこなかったのだ。しかし、こう考えてみてはどうだろうか？水道管の整備を日本が行なっていないから…。そうしたらやはり私達も水不足に悩む国の人達と同じように川に水をくみにいかななくてはならない。大変な労力を必要とすることだ。そのように考えればコップ一杯の水にもダムを管理している人、浄水場で働いている人と、さまざまな人の苦労の上に成り立っているといえる。「水」自体についてと、家庭に水が届くまでの人々の努力。その二つのことに対する感謝の気持ちを私は忘れていたのだ――。

私の住む前橋市には「水と緑と詩の街」とうたわれているように、利根川を始

めとしてたくさんの方が流れている。川のほとりは穏やかで人々のいいこの場となっていて、私の大好きな場所だ。十年先、私達が大人になった時にもこの豊かな水源が途切れることのないようにしたい。その為に果たして私達一人一人何ができるのだろうか？私はそのことについても自分なりに考えてみた。

まずは、前に挙げた様に一人一人が水の重要さを認識しなおすべきだろう。以前の私の様に水に対して無知である為に「当たり前」と思い、何も考えずに水を使っている人は多いと思う。しかし、その当たり前が手に入らずに苦労している人は確かにいるのだからそのことをきちんと伝えるべきだろう。次に、環境問題の解決にも繋がることだが排水の処理に気を配ること。排水をきちんとした状態で川、海に戻そうとするとその排水の何十倍ともなる水で薄めなくてはならないのだ。それをなるべく少なくする為の努力。地球に住むものとしてのマナーと考へ行なっていくかなければならないことだと思ふ。

前に述べた二つのことに一貫していえること。それは「水に対してありがたい」という思いをもち、水を利用していくということだ。ありがたいという気持ちを保持せば当たり前とは思えないだろうし、水のもたらしてくれる恩恵に報いようとすれば、水を正しい状態で元に戻そうとすることも当然だろう。

「ありがとう」――、この思いを胸に水を利用していきこうと思ふ。このこと自体が水を大切にしようとしていることの表れだと思うから。

「荒川に学ぶ」

埼玉県 秩父市立大滝中学校
三年 木下 沙耶

「お水もつてきて。」

私の祖父の家には、たくさんの親戚が集まる。そして、みな必ず、

「こっちの水は、おいしいねえ。」

「うちの方は飲めないよ。」

と、口ぐちに話します。都会の方へ行くにつれて、消毒の味が強くて、飲めないそう。それを聞いて私は、「大滝に住んでいてよかった。思うぞんぶん水が使えるもん。」と、とっても自慢に思った。

大滝には、荒川の源流があり、二瀬ダムと滝沢ダムの二つのダムが存在している。下流域にとつても、重要な水源地域でもあり、水にとつても恵まれている。

そして、大滝では、少しでもきれいな水を川へ流そうと、各家庭で浄化槽を取り付け、下流域につないでいる。それなのに、「水が飲めないなんて……」とがっかりした。けれども、思い返してみると、きれいな水が身近にあることで、水のむだ使いが多かったりもして、あまり水に感心を持っていないことに気づいた。今の荒川は、どうになっているのかが知りたくなった。水について、もっとよく知る必要があると思ったからだ。

丁度そのとき、「荒川中学生サミット」に参加することができた。これは、上下流域域の中学生代表者が交流を深め、ふるさと埼玉の豊かな自然を愛する心と、環境保全の意識を高めるために開催されたものだ。ほかの中学生と合角ダムを見学したり、吉田元気村へ行った。ここでは、「バイオトイレ」といって、水を一切使わず、木くずを使い、その中の微生物で排出物を浄化するという、水を使わず、水の汚染を防ぐものだ。他にも、傾斜土槽法など、成果を上げているものがあった。私は、そういった活動を、秩父が行っていることを知って、とてもおどろいた。

さらに、下流域中学校や市内代表の中学生が環境保全の取り組みについての活動報告を行った。おどろいたのは、その活動だ。みな荒川のために、たくさんの活動をしていた。全校でゴミ拾いを行ったり、川の状態をしっかりと把握し、周りの昆虫や植物について調べていた。

私の地域では、年に二回ほどゴミ拾いを行っている。しかし、実際、川まで行ってゴミ拾いをするのは、めったになかった。だから、下流域の中学生の積極的な活動に感心した。少しでもきれいにしようという気持ちが伝わり、ただ水を使っていた私は、はっとさせられた。

この荒川サミットで、水の大切さについて深く考えることができた。私達が住む大滝がどれほどきれいな水か。又、日本がどれだけ水に恵まれているか。ほかにも、たくさんのことを学ぶことができた。秩父市長さんは、

「今、豊かな森林と清らかな荒川の水を再生し、次世代へ引き継ぐことが流域に暮らす私たちの使命である」と述べていた。私達だけでなく、次世代へ残すということ、水や荒川を「守る」と考えるきっかけとなった。

きれいな水、荒川があるおかげで、私達人間だけでなく、水辺に住む動物、野鳥や昆虫野草もたくさん生存でき、豊かな自然が生まれる。未来の荒川は、その状態を保つこと、それ以上の今後の活動によって、よりきれいな荒川になる。一人一人の心がけや、取り組みによって、荒川があつて、豊かな自然があり、私達が暮らす。この環境をくずさぬように、水を大切にしたい。そして、美しい荒川にしていこう。

「乳牛と水」

千葉県 いすみ市立国吉中学校
二年 村 田 優 人

牛飲馬食という言葉を知っていますか。僕はこの言葉を祖父から聞きました。これは、牛が水を飲み、馬がまぐさを食うようにたくさん飲食することだそうです。僕の家は乳牛牧場です。この言葉のとおり家の乳牛も大量の水を飲みます。乳牛は一日に百二十から百四十リットルも飲むのです。そのうえ、水だったら何でも良いわけではなく、井戸から汲み上げたての水が理想です。家には今百二十頭の牛がいるので、飲み水だけで一日一万五千六百リットル必要になる計算です。この数字に僕はたいへん驚きました。

祖父がこの牧場を始める時、一番不安に思ったのは、いすみ地方に多いガス水だったそうです。ガス水では牛は育てられません。牧場に適した水を得るために、県にお願いして何本も試掘し、やっと良い水が掘れたのだそうです。水質検査は保健所にやってもらいました。また、医者をやっているおじにもたのんで検査してもらいました。両検査とも合格した時、祖父は「これでいける。」と思いきや安心したそうです。今、家の貯水タンクには水が三十トン入りますが、最良の水を手に入れるのはたいへんだったな、と改めて思いました。

こんな大切な水なのに、井戸のポンプが故障したり、パイプが壊れてしまったらどうするのかと思います、また祖父にたずねてみました。牛舎にある自動給水が止まると、二、三時間で牛がモーモー鳴いて大騒ぎになります。しかも、餌も食べなくなり大変なことになります。今までに一回ありました。牛たちは、一時も水をからすことはできないので、あの時は五百メートルほど離れた隣の牧場から、ホースで水をひいて給水機につないだそうです。牛たちの命は、水で守られているんだなとつくづく感じました。

もちろん家には水道水も引いてあります。水道水は、衛生面に特に気を使わなくてはならないミルク関係の機具、貯乳タンクのそうじに使います。その

他、乳牛の糞尿、また搾乳前の乳房、お尻など汚れを落とす時にも大量に水を使い、きれいにしています。

僕の家にはもう一つ大切な水があります。それは雨です。牧草は青刈りにするので、一年間に同じ畑を五回から六回刈りとって飼料にします。何回も刈り取るには、雨が適度に降ってくれることが、牧草への給水として一番なのです。もちろん肥料などもきちんと使って作付けした上のことですが、自然の恵みの雨がなにかには、大量の牧草は収穫できないのです。水は本当に大切なものです。

僕の住んでいるいすみ市は、夷隅米として有名なおいしいお米の産地です。米作りにも水は欠かせません。それぞれの田に素早く水が入られるような施設も整備されています。きれいに植えられた田の水を管理するのも、ずいぶん苦労があると聞いています。稲を育てておいしい米を作るのも、牛を育てておいしい牛乳を作るのも、きれいな水なしではできません。きれいな水に恵まれている日本でも、きれいな水として守っていかねければならない危険な状況にあります。僕はこの牧場を継いで、安全でおいしい牛乳を作りたいと考えています。そのためには、蛇口をこまめに閉めたりして水を必要以上に使わないように心がけていきたいと思っています。そして牛と水の関係について、もっと詳しく学んでいき、きれいな水を大切に守っていくべきだと思っています。

「かけがえのない水」

東京都 文京区立第六中学校
二年 中 村 華 子

地球は水の星です。水に包まれて、青く輝いている地球。

水は、地球の命です。雨となり川となり、海となり、地球上に生きるあらゆるものの命の源となります。雨の降った地には草木が育ち、川には魚が住み、海には海の生き物が住んでいます。そして、私たち人間にとってもかかせない存在です。水は偉大です。大きく広く、すべてを包みこんでくれる、というのが私にとっての水のイメージです。

今、私たちは水を自由に使うことができます。蛇口をひねればきれいな水がいくらでも出てくるし、好きなように使えます。日本は世界の中でも大量の水消費国だといいい、一年に一人あたりが消費する水の量は約百三十七立方メートルもあるそうです。私にはとても想像できないほど大きな数字で、日本はなんて贅沢な国なんだろうと驚きました。

しかし、こんな贅沢の一方で、地球の水のバランスがくずれつつある事が分かりました。私はこの前、水不足に関する新聞記事を読み、その事を知りました。地球温暖化が進行すると、雨や雪として水が大量に降る地域と反対にあまり降らない地域のどちらかの地域になり、洪水や渇水が各地で多発するようになってしまっているのだそうです。もしそうなった場合、雨の多い地域では、現在百年に一度の割合の大洪水が五年に一度の確率で起こるようになってしまい、乾燥している地域では降雨量が減少し、蒸発が激しくなるのでさらにひどい渇水になってしまふ、とうことが書いてありました。

このままではいけないと気付きました。今の幸せより、もっと未来を見つめて、地域に合った使い方をしなくてはいけないと強く感じました。そして、水不足になる前に、今からでも水を節約して大切にしたい、と考えました。本当は、もっとたくさんの人に、水の大切さを実感してほしいし、今から行動しなくては

いけないって、危機感を感じたりしてほしいと思います。でも、まずは身近なところから始めていこうと思います。

私が水を節約しようとしたとき、気を付けようと思ったのは、ケチになるんじゃないくて、有効に、無駄なく使う、ということでした。それを頭においていくつかの節水法を考えました。一つは、蛇口をひねる時、いつも水を弱めに出す、ということでした。家の水道も学校の水道も、全部蛇口を開いて出せるだけ水を出すと、とても勢いが良く、もつたいたいということに気がつきました。だから、水の勢いを七割から八割くらいになるように調節して使うことにしました。二つめは、お湯をわかすときなど、やかに水を入れすぎないようにすることです。今までは、よく入れすぎて残りを流してしまったりしていました。だから、やたらと多く入れてしまわないように気をつけようと思います。

ほんの小さな事ではあるけれど、この小さな積み重ねで、私の一年間の水の消費量はけっこう減るかもしれません。まずは、自分が変わって、そこから家族や友達へと、水の大切さを伝えていきたいと思っています。

そして、世界が水の大切さを実感して、地球を守ろうと思うまで、私たちの影響をふくらませていけるように、がんばろうと思います。

いつまでも地球が青く、輝く水の星でありますように。その青さがくもることがありませんようにと、願います。

「命の水」

神奈川県 葉山町立葉山中学校

二年 森川 愛美

街はまだ眠っていた。寒い寒い朝だった。時間にすればほんの一瞬の揺れが六千人以上の尊い命を奪い、家や財産そして、人々の暮らしをメチャクチャに打ち砕いた。私はその時天井から降ってくるガラスの破片や倒れてくる家具から守るように覆いかぶさる祖母の下で泣いていた。弟の枕元には隣の部屋のサイドボードの上においてあった大理石の置時計が飛んでいた。赤ん坊だった弟がもう一度寝返りを打っていたら今頃彼は生きてはいなかっただろう。一九九五年一月十七日早朝。その置時計は、五時四十六分を指したまま、止まっていた。

私はその日、母と弟の三人で偶然神戸の祖母宅にて被災した。祖母の家は一部損壊したものの、けが人はなく幸いだった。しかしガス水道電気のライフラインは完全にストップし、風呂もトイレも使えず、弟のミルク用の水は一時間も歩いてもらいに行かなければならなかったそうだった。

当時の私は二歳になったばかりだったが、その時の記憶はおぼろげながら残っている。粉雪の舞う中、母に背負われて長い長い行列に並んでいた。そしてやつと手にした水は一人につきバケツ二杯。母がこぼさないようによろけながらも大事に大事に持ち帰る水を、その背中で見ている私は幼いながら、無駄にしてはならないものとして心に刻み込んだ。

その時の記憶のせいだろうか、私は今でも出しっぱなしの洗面の水やエチケツト流しというトイレの二度流しが嫌いである。当時の生活を事あるごとに母や祖母から聞かされていたこともある。とにかく苦労して汲んできたバケツ二杯の水は、トイレで一度流せば終わり。普段大切な水をどれほど無駄遣いしてきたかを思い知ったという事だ。

男手がない祖母宅では、そう頻繁に水汲みに出かけるわけには行かない。そこでわずかな水を最大限に利用する方法を考えた。まず飲み水以外の水は、すべて捨てないで再利用する。米を研いだ汁も、そのままためておいて顔を洗った

り、体を拭いたり、歯を磨く時に使う。そしてさらに拭き掃除に使った後、トイレの流しに使う。一滴だって無駄にはできない、大切な水。そう、水は命に直結する。

だがそれは災害時に限ったことではない。考えてみれば、この日本でもほんの五十年ほど前までは、井戸から水を汲んできてかめのため、大事に大事に使っていた。家々の台所には井戸の神様が祀られていたのだと祖母から聞いた。風呂は沢から汲んできて沸かした。水汲みはすべて祖母たち子どもの仕事だった。昔の人々は、自然を畏れ、水がどんなに貴重で限りある資源であるという事にちゃんと気付いていたのだ。

最近、地球規模で異常気象が続いている。洪水が起こったと思えば、洪水が続いたり、いったいこの地球はどうなってしまうのだろうか。水も空気も生命も、この地球上の何一つ人間の手では作る事ができないものだ。そして自然災害もまた、人の力ではどうする事もできないのなら、せめてその被害を最小限にとどめるよう努力をするべきだろう。普段の心掛け一つで二次災害を防ぐことはできるのだから。

家には「あの日」のことを忘れてしまわないように当時のビデオや新聞の切り抜きを大切に取ってある。焼け落ちる建物を前に水が出ないため、目の前で助けを求め人を救えなかったと男泣きする消防士。一方では生き埋めになりながらも、隙間から落ちてくる裏山の湧き水をすすって奇跡の生還を果たした姿もある。まさに水とは「命」そのものだ。

あれから十一年が過ぎ、神戸の街は見違えるほどに美しくなった。でも人々はあの日を決して忘れない。私もまたこの記憶を風化せず水も命も全て地球の一環ととらえ、自分に何ができるか常に考えて生きていきたい。

「知恵の雨水タンク」

山梨県 駿台甲府中学校
二年 鶴田 萌

私は雨が降るとドキドキする。なぜならば私は中学一年生の時、「酸性雨」について研究したからだ。主にバックテストで雨水測定をしたり、東京都墨田区にある「雨水資料館」に行ったりして調べた。バックテストは今も続けていて、旅行へ行くときも持っていていき、雨が降るたびに測定している。甲府はほぼ毎回酸性雨だ。

しかし、その雨がダムにたまり、浄水場できれいにされて、私たちの生活を支えている。もし水がなかったら、私たちは生きていけないだろう。考えてみれば、料理をしたり、風呂に入ったたり、洗たくをしたりと、毎日のいろいろな場面で、水は使われている。

そんな大切な水は無限にあるわけではなく、限りある資源なのだ。だから世界ではいろいろな工夫がなされている。私が雨水資料館で見たのは「雨水タンク」というものだ。スリランカでは、パンプキン型雨水タンクというものに雨水をため、飲み水を始めとする生活用水に利用されているのだそうだ。日本でも少しずつ広がっている。他にも世界のいろいろな国の雨水タンクなどが展示してあった。雨水でまかなえる部分は利用するようにすれば、水を無駄にしなくてすむと私は思う。

私は研究する中で、酸性雨の怖さだけでなく、水の大切さ、ありがたさなどをひしひしと感じた。そこで私は自分の水の使い方について考えてみた。すると、かなりの水資源を無駄にしていることに気がついた。例えば風呂。私は使ってもいないのに水を流しっぱなしにしていることが多い。そして顔を洗うときも、たくさんの水を使っている。自分でももったいないと思う。そして母にこんなことを言われた。

「風呂や顔を洗うとき、流しっぱなしにしているその水で、何人もの子どもが助かるんだよ。」

調べてみると、世界の六人に一人は安全な水を飲むことができないそうだ。そして八秒に一人の子どもが汚れた水が原因で死んでいる。それでも他に飲む水がなくて、不衛生な水を飲むしかない人たちもいる。そんな中で日本のような先進国ではたくさんの水を使っている。今この瞬間も死んでいく人がいるのに、私は水を無駄にしている。私はいかに自分のことしか考えていなかったか痛感した。

水は私たちだけのものではない。この地球に住む生命の源となっている。だから自分勝手に使ってはいけないのだ。水資源には限りがあることを一人一人が知ることが重要だと思う。大切な水を守るためにはまず知識を得ることからだ。新聞や本を読む、ニュースを聞く、人から話を聞く、インターネットで調べる。そんなちよつとした努力で、感性や意識は変わると思う。意識さえすれば、普段の生活でも水を無駄にしないようになると私は思う。

山梨県は「名水百選」に選ばれたり、水道水がおいしいことで有名である。私はこのことに強い誇りをもっている。私たちの学校では毎日、茶や水を水筒に入れて家から持っていくことになっている。学校全体で水の大切さに取りくんである。雨の日は、荷物が重くて嫌だと思ふこともある。しかし、ちよつとした努力でも皆で実行すれば、大きな成果が期待できると思う。世界で安全な水を飲めない人たちがいることを知り、雨水でまかなえる部分はまかなうなど、知恵をしぼって大切に使わなければと思う。

水は台風や洪水など、時に災害をひき起こしもするが、なくてはならないものだ。水をめぐって、争いが起きるといふことは、それほど大切なものと言いかえることもできる。

この地球に生きるものとして、私たちの子どももの世代にも安全な水を残していく義務が私たちにはある。雨が降った後のキラキラとした植物や、澄んだ空を見ながらそう思った。

「水と人との文化」

長野県 売木村立売木中学校
三年 溝 口 うらら

あなたの家の周りには、どんな川がありますか。水道をひねって出てくる水は、どんな水ですか。

私は、大阪の市街地で育ったので、川で遊ぶ事がありませんでした。しかし、考えてみれば、今の時代に、川の中に入って思いっ切り遊べる子どもは、とても少ないと感じます。また、水道の水を安心して飲める場所も、少なくなっているという話も聞きました。

私が水の事について考えなければいけないと思い始めたのは、長野県にある売木村という所に住む事になったからです。

私は中学校二年生の時から、「山村留学生」として売木村に住んでいます。売木村は人口七〇〇人程の小さな村で、村には美しい川が流れています。私は売木村に初めて訪れた時、「こんなにも自然が残っている所があるのか。」と驚きました。それ程、この村は美しい所です。人口が少ないので、自然が残っていて当然と思う人もいるかもしれませんが。しかし私は、売木村がこんなにも豊かなのは、水に関係するのではないかと思うのです。

例えば、村でたくさん作られているお米は、川から流れてくる「美しい水」で作られています。以前私は、村の方に「なぜこの村のお米はこんなに美味しいんですか？」と聞いた事があります。その時村の方は、「この村の水が美味しいからだ。そこらへんの水とはちがう。売木の水が美味しいんだ。」と教えてくれました。単なる「美味しい水」「栄養のある水」という点だけで言えば、もともと優れた水があるのかもしれませんが。でも、本当の意味で「美しい水」とは、その水を飲んで、使っている私達自身が「この水はいい水だ。」と心から思える水でなければいけないだと思います。さらに、サラサラと流れる小川であったり、夏の暑い日に道にまく打ち水であったり、体に取り入れる以外にも、五感で水を楽し

む文化・心がこの村の人たちにはあるんだと思いました。その意味で村にとって美しい水は、生活になくてはならない物だとも言えます。

毎日水道をひねって出てくる水は、村の川からひかれた水だそうです。そして使われた水は、村の川に戻っていきます。だからこの村ではみんな水を大切に使い、川を汚さないようにしています。その気持ちは、他の面にも通じていて、ゴミの分別に力を入れたり、ポイ捨ては絶対にしなかったり、水を大切に使いたいという思いが中心になって、村全体を美しく保つ事が出来ています。

そんな売木村では、子供の数がだんだん減っています。お米作りが出来る村人も、いつかはいなくなるかもしれません。水と人が共に生きていく文化の一つが消えてしまうかもしれないのです。私の地元のように、既に美しい川や水のない所が日本だけでもたくさんあります。それらの場所一つ一つに、売木村のような、水と人との文化がいきづいていたら、環境問題などが起きるはずがないと思うのです。そこに住む人々は必ず、その水を守ろうとするからです。水と人との文化を無くさない。そのために私が出来る事は、何でしょうか。例えば、新しく川を作る事や、ほとんど存在しなくなつてしまった文化を取り戻す事は、簡単にできる事ではありません。しかし、売木村のような所を知った私が、その素晴らしさを伝える事は出来ます。そして、それを聞いた誰かが、何かを感じてくれればいいのです。一人に伝えるだけでは何も変わらないかもしれませんが、でも、伝え合いの先で、日本中の人々が知る事が出来たら、それは必ず大きな一歩になるはずです。

あなたの近くにある水は、本当に美しいですか。

「大切な資源「水」」

三重県 津市立一身田中学校
三年 北川 幸枝

私は、雨の日は嫌いです。学校へ行く時に雨が降っていると、カッパを着なければなりません。楽しみにしていた旅行も雨のせいで予定が狂ってしまうことも何度かありました。雨の日は気分も沈むし、雨に感謝したことは一度もありませんでした。むしろ、雨なんて降らなければいいのと思っていました。

私は、水不足にはあったことがありません。テレビで空になったダムや枯れた木は見たことがあったけど、自分が直接見たのではないので、「へえ、大変だなあ。」と人事のように思っていました。私にとって、水不足とはドラマのような現実とかけ離れた世界だったのです。水には絶対に不自由しない。水があることは当たり前と思っていました。だから、顔を洗う時も平気で水を出しっぱなしにして、水を大切にしていなかったように思います。

でも、私はあることをきっかけに水のことを少しづつ気にするようになりました。

私は昨年の夏、部活の合宿で県内の山の中に行きました。その山の中には大きなダムがあります。そのダムはいつも水がたくさん溜まっていて、その水に映る周りの木はすごくきれいでした。私は、そのダムの景色を楽しみにしていました。

でも、私が見たのは水が一滴もない、見ているだけでも暑くなる、コンクリートのダムでした。私はすごく驚きました。その後、ダムのことを聞いてみたら、雨が降らなくて水が溜まらないという答えが返ってきました。

合宿所でも、水道から出る水は全開にしても、チョロチョロと少ない水しか出ず、すごく不便でした。私はその時、初めて雨の大切さを感じました。もしも、雨が降らなくなったら…？私たちは間違いなく生きていけなくなるでしょう。雨は、私たちの命をつなぐ大切な「水」だからです。

春にまた同じ場所を見に行くと、そこには私を知る、ダムの本来の姿に戻って

いて安心しました。

水は、私たちの生活に必ずなくてはならない大切な「資源」です。私たちは、その水の大切さに気づいていたのでしょうか。今、世間では石油・石炭がなくなると騒がれています。そのおかげで、石油・石炭に対しての使い方はずいぶん考えられるようになりました。でも、水という資源はどう守られているのかとても疑問に思います。私たちは平気で汚水を川に流したり、産業発展や生活をより便利にということを言い訳に、水を守るどころか、逆に悪くしているのではないかと思います。

私は、水の週間のポスターを見てこの問題に気がきました。ポスターを見るまで気づかなかったというのは情けないなと思ったけど、この機会に水の大切さに、雨の大切さに気がついてよかったです。今、気づいたことで、顔を洗う前にふと水のことを考えたり、油を水道に流す前に手がとまったり、普段の行いも大きく変わると思います。一人の力やたった一回の行動はすごく小さいけれど、それを多くの人が継続してやったら、本当に大きな力になると思います。水は私たちの生活を支えてくれているのだから、水を守っていくのは、私たち人間の義務なのです。

水は、津波や洪水のような災害をもたらし、人間を苦しめることもあるけれど、絶対になくなってはいけな資源です。人間を幸せにも不幸せにもする水はすごく不思議だと思えます。私たちはこれから、水とどういう風に付き合っていくかを考えることによって、水にとっても、人間にとっても良い関係になれると思います。

これから、いつまでも水がある未来を守るために少しずついいから活動していきたいです。そして、たまに私の予定を狂わせてしまう雨にも感謝したいと思います。

「負の連鎖から循環する水へ」

滋賀県 守山市立守山中学校
三年 高橋 渉

四月。また、あの季節がやってきた。晴れの予報だというのに空全体が黄色く見える。いつもなら琵琶湖の向こうにくっきりとその姿を見せる比叡の山並みも、今日はひどくぼんやりとかすんで見える。春の風物詩、「黄砂」の季節の到来である。

黄砂とは、春先に中国内陸部にある砂漠地帯の細かい砂が高さ五千〜一万メートルの上空まで巻き上げられ、偏西風に乗って飛来する現象で、遠くは北米や南極大陸でも確認されている。日本へは約四千キロの距離を、二・三日かけてやって来て、年間の飛来量は百万〜三百万トンにもものぼると言われている。日本では視程が五キロメートル程度になって、ニュースや天気予報で話題になるぐらいだが、中国大陸や韓国では、交通機関がマヒしたり、学校が休校になるなど、生活に直接関わる深刻な問題になっている。黄砂の主な原因は、地球温暖化や耕作の放棄、過度な放牧などが掲げられるが、私が特に気になる原因の一つに、人の都合により行われた森林伐採による砂漠化がある。砂漠化が進むと、その土地は、自身で水を保つ能力を失ってしまう。

私が黄砂に興味を持つようになったきっかけは、小学校一年生の時から続けた。酸性雨の自由研究によるものだ。ある日見つけた新聞記事に黄砂には酸性を中和する働きがあると書いてあったので、それ以来、黄砂についての資料を集めてきた。その多くの資料を読むと、必ず共通することがある。それは、原因が水不足によるものであること。そして、黄砂が飛来することによって様々な場面で水が必要になってくるという事実である。例えば、農家では、農作物に黄砂が積もると、一つ一つ水洗いをしなければ出荷ができなくなる。水洗いが必要なのは農作物だけではない。洗濯物に黄砂が付くと、洗い直しを余儀なくされる。また、中古車の販売店やガソリンスタンドでは長蛇の列ができて、たくさんの車の

洗車に追われる。こうして私たちは、黄砂によって大量の水の無駄使いをさせられているのである。こうした黄砂の例のように、水不足によって起こった現象を、また水によって解消しなければならぬという矛盾。本来使わなくて済む水を余計に使わなければならない、この「水の負の連鎖」を断ち切らなくてはならないと思う。それには、水の循環を元の正常な道すじに戻す為の工夫が必要になってくる。

私の住む滋賀県では、今年から「琵琶湖森林づくり県民税」というものが導入された。これは、滋賀県の半分の面積を占める森林を保全していくためのもので、滋賀県の環境を守る上で重要なものになると言われている。森林を保全することにより、森林の持つ水源かん養などの機能が向上し、水の循環にも一役買いそうだ。これと同じような取り組みは、アフリカで「グリーンベルト運動」を推進するワンガリ・マータイさんや、中国の黄土地方で活動をしている日本のNPO法人などによってすでに行われている。これらのことから水環境を守る上で鍵になるのは、「水の循環」だと私は考える。水をスムーズに循環させることにより、限りある資源である水を繰り返し、効率的に使うことができ、合わせて水不足によって起こる様々な矛盾も解消される。身近な取り組みで言えば、私の学校では雨水を溜めて、花の水やりなどに利用している。これも私たちの日々の生活の中で実践することができると言える。

水は、私たちが共有する貴重な資源であり、私たちにはそれを次の世代に引き継いでいく義務と責任がある。そのためには、植林活動等に加え、私たち一人ひとりが日々の生活の中で、水を循環させる取り組みを考える必要があると思う。これからは、まず私にできることから、水の循環に少しでも貢献できるように、努力を続けていきたい。